

こども発達コース 教員紹介



こども発達コースには、幼児教育学、教育学、心理学を専門とする教員が所属しています。各教員はそれぞれの視点から、人間や教育に対する理解を深めるために学生と一緒に学び、研究をしています。ここでは各教員が、自分の専門とする研究や、担当する講義について紹介します。

教育行政学・教育法学 担当教員：佐藤 修司（教授）

教育行政学、教育法学を専門としています。教育を、行政学や法学、政治学、経済学などの観点から研究しています。また、文部科学省や教育委員会などの教育行政機関、校長先生をはじめとする教職員制度（採用・養成・研修・人事・評価など）、学校経営、教育政策、教育法制、教育財政などを対象として研究しています。

現在の教育は、いじめや不登校、学力低下、校内暴力など、さまざまな問題を抱えています。多くは 1960 年から 70 年代に生まれ、拡大してきた問題です。これまでの 40 年近くの間、さまざまな対策が取られてきたにも関わらず、解決に至っていません。むしろ、悪化しているものさえあります。選択や評価、競争、効率が重視される中で、教師も、子どもも学校の中で息苦しくなっているように見えます。なぜそうなってしまうのか、これからどうしていけばいいのか、一緒に考えてみましょう。

教育哲学 担当教員：小池 孝範（准教授）

「教育」という活動は、人間にとって必要不可欠だと考えられています。そして、教育といえば、学校での教育を真っ先に思い浮かべる人が多いと思います。しかし、日本で学校教育が定着してまだ百数十年、世界を見渡してもせいぜい 200~300 年。では、学校誕生以前にはどんな教育があったのだろうか、そこではどんなふうに学んでいたのだろうか。そう考えてみると、今、私たちが当たり前だと考えている教育のあり方も、実は当たり前のことではないのかもしれない。また、様々な研究が進むなかで、教育（教え—教えられる関係）のない社会の報告や、今私たちが考えている「子ども」も近代以降の産物だとする指摘がなされています。だとすれば、人間にとって教育さえも必要不可欠でないのかもしれない。

今、私たちは教育が必要不可欠だ、学校に通うことが当たり前だと考えていますが、一方では、学校や教育が様々な問題を抱え、多くに批判にさらされていることも事実です。では、どうしたらいいのだろう。こうした課題に応える手がかりが、学校がなかった時代の教育や学び、様々な文化の中で行われている多様な学びのあり方にあるのではないか、歴史や文化に学びながら、今の教育の問題や課題を、ヨコやナナメなどいろんな視点から考えています。

生涯学習学 担当教員 原 義彦（准教授）

「公民館を診断する。」これが私の研究関心です。わが国では、公民館や図書館、博物館は地域における生涯学習を推進する中心的な施設として期待されています。そうした期待に応えられるようにするには、これらの施設がどのような問題状況にあるかを明らかにし、どのような改善が必要であるかがわからないといけません。そのために、「公民館を診断する」必要があるわけです。例えていえば、私達が健康で充実した生活を送るためには、健康診断が必要であるのと似ています。



公民館を診断するには技法が不可欠です。その技法を公民館経営診断技法と呼んでおり、この技法の開発が目下の研究テーマになっています。これまで、医者がどのように患者の病気を診断するのかを参考にしながら、公民館利用の促進をねらいとした公民館経営診断技法を開発してきました。現在は、公民館がまちづくりや地域づくりを目標にした技法の開発に取り組みながら、公民館経営診断技法の総合化を目指しています

浦野 弘（教授） 研究分野：教育方法学，教育工学，科学教育

学校における授業，教育実践を対象に，子どもや教師，さらに教材や教育の目標などが有機的に関連した一つのシステムとしてとらえ，そのシステムが最適になるように教育を改善しようとする学問が教育工学です。

その中でも，私は，先生方の授業方法の改善や子どもの学びのプロセスの解明，さらにその指導方法などを研究してい



ます。そこで，小中高等学校の先生方の校内研修会には多数出向いて，協同研究も進めています。

また，コンピュータをはじめとした情報機器が社会の中にあふれ，日常生活にも，また学校の授業においても活用する時代になってきています。そのようなメディアとどうお付き合いをしていったらいいのかというメディア・リテラシーについても，研究をしています。



姫野 完治 (准教授) 専門：教師学・教育方法学・教育工学

学校や教師の役割や仕事の領域を考えるとともに、学校や教師が成長しやすい環境やカリキュラムについて研究しています。

あなたが思い描く先生とは、どんな先生でしょうか。小学校の時のやさしい先生？ 部活動の顧問をしていた厳しい先生？ ユーモアがあって、一緒に遊んでくれた先生？ 進路を決めかねて悩んでいた時に、親身に相談に乗ってくれた先生を思い描く人もいるでしょう。自分の思いをあまり大切にしてもらえず、嫌いだった先生を思い出す人もいるかもしれません。教職志望の有無にかかわらず、担任教師への憧れ、好意、反感、嫌悪などをもとに、人はこれまで受けた教育体験の中で、すでに自らの理想の／あるいは反理想の教師像を創りあげているものです。

私は、これから先生になる学生や、いま学校で教師をしている先生方が、自分なりの理想の教師像を掲げ、成長していける環境やカリキュラムを構築することを専門としています。また、教育実習などの実践経験を通して、教職志望学生がどのように学んでいっているかを調査したり、教師の成長に影響する要因（たとえば、結婚や子育て、挫折、恩師との出会い等）を探ったりしています。「教える人」の成長過程の探索とそのためのサポートを主な研究テーマとしています。

私のゼミは、「人から学ぶ」「自然から学ぶ」をコンセプトにしています。教師を目指す人だけでなく、「教える」「学ぶ」等に興味を持っている人であれば、大歓迎です。また、大学内の畑で農作業を行うこと、夏と冬の合宿研究会（遊びと勉強）等のイベントがあります。いろんなことに興味を持って活動し、人間としての幅を広げられるゼミにしたいと考えています。



学校マネジメント・教育政策 担当教員：神居 隆（教授）



学校マネジメント、教育政策等を担当しております。学校経営において最も大切にすべきことは何でしょうか。このことは校長のみならず、学校教員のすべてが共有すべきことであると考えます。学校の地域における役割を理解し、子ども並びに保護者から寄せられる期待に応えることと共に、学校を取り巻く様々な危険因子の分析及びそれらへの対応できることなど、学校現場の様々な課題を現場目線で分析・研究しています。国際

化・情報化の進展など社会の変化に伴い、それらの内容が学習指導要領に盛り込まれ、教育施策にも反映されてきております。それらをどのように取り扱えばよいのか、また、児童・生徒に与える影響等について、ちょっと先取りして考えてみたいと思います。

学部の授業では、教職総合基礎や教職発展演習（写真）、教職実践演習などの実習系科目を、大学院研究科では教育マネジメントや学校経営実践論などを主に担当します。教員志望の諸君に寄り添っていたいと考えています。

奥山 順子（Junko OKUYAMA）（教授）

研究分野：幼児教育学（保育実践研究法、保育者の専門性、幼児教育の歴史）

幼児教育の実践を研究の対象としています。「幼児期の教育」はいろいろな形で行われています。現在の幼稚園教育や保育所の保育は、国の基準では「幼児の自発的活動としての遊びを中心」とした総合的な指導であるとされています。しかし世間では、少しでも早いうちにと小学校の学習内容やスポーツや楽器などの特定の技能を先取りして教えたりする教育もあって、一部では支持されています。では乳幼児期の保育・教育は本来どのような目的で行われるべきなのでしょうか。



私は「遊びを中心とする保育」を基本として、保育のありようを考えています。乳幼児は遊びを通して多くのことを学び、成長していますが、何か特定の知識や技能を身につけることのように、目に見える成果として成長や発達が表れにくいものです。この、目に見えにくい遊びを通しての子どもたちの育ちを、保育実践ではどのようにして理解していくのか、ということを中心に保育者の

専門性や幼児教育独自の計画の質を考えることが研究課題です。これらの課題について、幼稚園に出かけて子どもたちとかかわりながらの記録に基づく考察と、歴史の中で子どもや保育の実践の記録からの考察を中心としています。

山名 裕子 (Yuko YAMANA) (准教授)

研究分野：幼児教育、発達心理学（特に幼児期・児童期の認知発達）

私たちは日常の生活の中で様々な「数」に関する知識を必要としています。数に関する知識がなければ、買い物することも、人と待ち合わせをすることもできません。このような数に関する知識がどのように獲得されるのか、日常生活や学校で獲得される知識にどのような関連があるのか、などに関心があります。

下の写真は、年長の子どもがクッキーをいっぱい作って、それをお店で売ろうと考えて準備しているところです。

たくさんのクッキーとその売り買いのときに必要となるお金を作っています。子どもたちは日常生活の中でのやりとりをよく観察していて、自分たちの“遊び”の中で具体化していきますが、その仕方は様々です。写真に見られるようにお金の表し方でも、もちろん、大人が使用しているそれとは全く違いますが、子どもなりの思考がよく現れています。

このように子どもが、特に幼児期や児童期の子どもが、どのように世界を認識し、具体化し、世界をひろげていくのかということ、数概念やことばの発達を通して研究しています。



瀬尾 知子 (Tomoko SENOO) (講師)

研究分野：幼児教育・保育学（乳幼児期の食事概念の発達過程）

人は、生きるためだけに食べるという行為をしているわけではありません。人は、食べることを通してコミュニケーション能力を身につけ、食文化を継承していきます。皆さんにとって食べることは、興味関心が高いことだと思います。しかし、子どもが食べるという経験を通してどのように食事の意義を理解していくのか、子どもにかかわる養育者の影響はあるのか等、まだまだわからないことが多いのです。

目の前にいる子どもたちは、人や社会のありようと無関係に存在しているわけではありません。子どもが人、社会とのかかわりの中でどのように知識や能力を身につけていくのか、食を切り口にして明らかにしたいと思っています。

森 和彦 研究室 (教授)

: 認知発達心理学

1. 描画や身振りなどの視覚的表現の発達過程
2. 描画や身振りなどの視覚的認知を基盤とした非言語的コミュニケーション
3. 指導と評価を一体化させる自己評価の開発

基本は実験や調査に基づく実証研究と言うことで、どちらかといえば保育園や幼稚園、小学校とフィールドに出て研究することが多いです。実験室でもやっていますが・・・。

大学院生向け：就学前児童の描画プランニングの研究

卒論生向け：ユニークさと言語的・非言語的コミュニケーションの関係

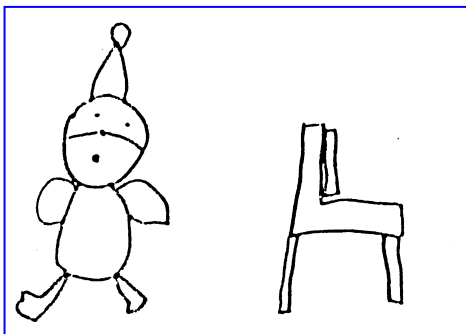
非言語的コミュニケーション（表象的身振り表現）の発達研究

就学前児童の描画発達など

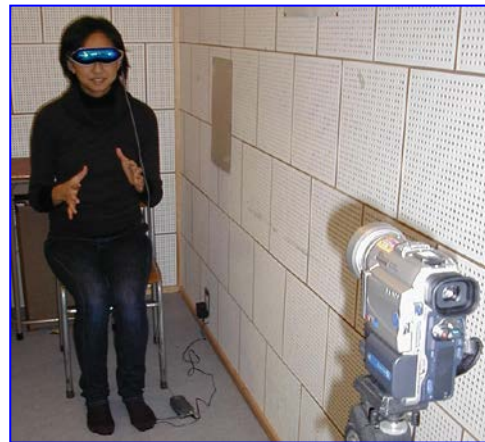
特殊実験受講生向け：重なりを伴う写生課題における就学前児童の発達過程

誤信念課題の支援に関する研究

関心・意欲に繋がる学習自己評価法の開発など



ある条件下で就学前児童に
イスに隠れるサンタさんを描いても
らいました。



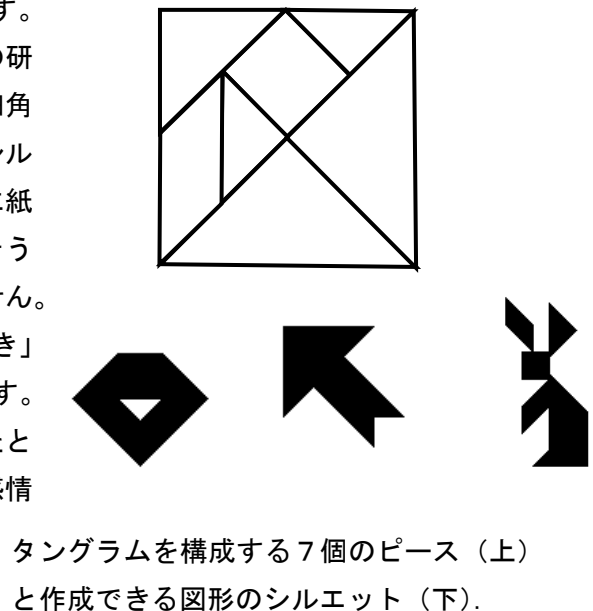
ある説明課題を HMD を用いて自分
(!)に向かって行うときの自発的な
身振り

学習心理学、生理心理学を担当しています。研究室では人間の『あたま』、『きもち』、『からだ』の関係について、学生たちと一緒に学んでいます。「あたま」とは人間の知的な思考、「きもち」とは感情や気分、「からだ」とは運動や行動のことを指します。従来の心理学ではこれら3つの心の要素は別々に研究されることが多かったのですが、3つの要素が絡まりあって行動や意思が生み出される現象を追っています。

授業では、心理学だけでなく脳科学や動物行動学などにも範囲を広げて、学生のみなさんに幅広く興味を持ってもらえるよう心がけています。心理学講読という授業では、こんな論文を読みました。チンパンジーの縄張りに一匹のよそ者が迷いこむと、その縄張りをパトロールするオスたちは自分たちが3匹以上ならよそ者を襲い、3匹より少なければ黙って警戒しているそうです。チンパンジーが敵を襲うという感情的な行動にも、ある種の算数がかかっていることに新鮮な驚きがあります。

また「タングラム」という数理パズルを解く思考の研究もしています。右図のような正方形から三角形や四角形を切り取ったピースを組み合わせると、下にあるシルエットを作ることができます（興味のある方は実際に紙で作って解いてみてください）。パッと見では簡単そうですが、やってみるとかなり難しくなかなか解けません。しかし知恵を絞っていると、あるとき急に「ひらめき」が生じて解けるのです。これが今流行のAHA体験です。ここに到るまで、うまくいかないイライラや完成したときの喜びなど、多くの感情を体験します。こうした感情体験がパズルを解く知的な思考にどう貢献しているのか、認知心理学の手法を用いて実験しています。

このように学生も私も「自分が楽しめる」と「まじめに心理学する」ことを両立させるべく、日々研究室で学んでいます。



卒業論文の実験風景

高田 知恵子（たかたちえこ）（教授） 臨床心理士

専門は臨床心理学です。臨床心理士として HIV カウンセリングと HIV 予防啓発を行うとともに、それらの活動の進め方を研究しています。大学際では院生主体の HIV 予防イベントを行っています。また、描画、コラージュなど表現療法（アートセラピー）の活用法も研究しています。大学院では「臨床心理学実習」など、臨床心理士の養成に必要な科目を担当しています。学部では「教育臨床概論」「臨床ケーススタディ」などを担当しています。



秋田大学 HIV 予防イベント [LOVE&SAFETY] 準備風景



表現療法研究会「粘土で気持ちを表そう！」

清水 貴裕（准教授） 専門：臨床心理学、臨床社会心理学

様々なストレスへの対処法や、リラクゼーションの方法について研究しています。その中でも特に、「催眠療法」に関心を持っています。「催眠」と聞くと、テレビなどでもときどき放送する何やらアヤシゲなものをイメージするかもしれませんね。ですが、催眠現象は心理学の中でちゃんと科学的に研究されている領域のひとつなのです。催眠療法は、最も古くから用いられている心理療法のひとつでもあります。催眠によって人々のこころの問題がどのように解決していくのかを明らかにすることから、人間行動について理解を深めることが私の主な研究のテーマです。

心理学に関係する授業では「心理学ⅡA」「人間関係の心理学」といった科目を担当していて、私たちの日常生活での行動を心理学からどのように説明できるかを伝えています。また、「心理学特殊実験」という授業では、3、4名の学生のグループで自分たちの関心のあるテーマについて実験をしています。もちろん、学生の研究テーマは催眠に限らず、人の行動に興味のあるものなら何でもOKです。

人の行動に興味を持っている高校生のみなさん、こども発達コースでお待ちしています！



シュブリエルの振り子という暗示現象を体験してもらっているところです